読書のスタンス

　読んだ本について書く場合、いろんなスタンスがあります。

「感想」「書評」「ブックレビュー」、この3つの書き方は、それぞれ違いますね。

【感想】

「感想」は、自分が読んだ本について、忘れないためのメモという性質があり、感想を書くことで、自分で確認する意味が強いかと思います。つまり、メインの読者は自分自身なのです。

【書評】

「書評」は、その本を正当に評価するという社会的な意味があると思います。

さきに読んだものが、まだその本をよんでいないものに話してきかせることです。

さすが、ものの見事な定義ですね。この定義を読んでわかるのは、書評のメインの読者は「まだその本をよんでいないもの」だということ。書評は、自分に向かって書くものではないのです。

著者と評者との対話ではなく、評者と読者との対話が「書評」という表現形式だと言えるでしょう。

　書評において大切なことは、以下の３点だと思います。

１）本の評価をあやまらないこと。

２）内容をわかりやすくダイジェストすること。

３）その結果（ああ、何か一つトクをした）と感じさせること。

たった3つのポイントですが、かなり深い意味を含んでいるようです。

例えばですが、、、。

読書のタイトル
　紫のスカートを履いた女
　第 161 回芥川賞受賞作。

レコメンデッド(recommended)
　顧客の好みを分析して、顧客に適すると思われる情報を提供すること

(興味・関心・おすすめ)
・世にも奇妙な物語が好きなひと
・日常に中の狂気を味わいたいひと
・大人の女性に関心があるひと

(契機、解説)
芥川受賞作を読んだことありますか
　新進作家による純文学の中・短編作品の中から最も優秀な作品に贈られる賞

そして、作家の紹介へ
　今村夏子　著
『こちらあみ子』『あひる』『星の子』『父と私の桜尾通り商店街』と、唯一無二の視点で描かれる世界観によって、作品を発表するごとに熱狂的な読者が増え続けている
これは、著者の最新作。

(内容紹介、あらすじなど)
　近所に住む「むらさきのスカートの女」と呼ばれる女性のことが、気になって仕方のない〈わたし〉は、彼女と「ともだち」になるために、自分と同じ職場で働きだすように誘導し……。

(特徴・感想を3点ほど)述べて
　1、純文 6、エンタメ 4
　2、女の習性 3 パターン
　3、みんな紫のスカートの女

1、は、シュールやユーモアが満載

“へんてこさ”を内面的に形作る
→オチを求める人向けではない
2、は、不穏な女性の習性3つ
・誰がみてもわかるあるある
・よく観察しないとわからない女あるある
・狂気と執着に満ちた理解不可能な女あるある(ないない)
3、は、紫のスカートの女の描写→どっかフワッとしている、つかみどころがない→天才の普通な部分、平凡の狂った部分、幸不幸のストーリー
日常の中の不思議・奇妙が面白い

(まとめ)
語りは黄色の私、紫とは補色の関係にある。

(参考)
2020―4―4 朝日
国際的な調査で読解力が落ちている？ グローバル時代には実用的な文章を読める力が必要？、なんだか「国語」をめぐる周辺が騒がしいようです。国語を学ぶとはどういうことなのでしょうか？。
書くための「読む」習慣
「読む」と言うインプット。
インプットが少ないとアウトプットのレパトリーも減る
読解力を基礎から育てる明確な処方箋はありません。
最近は国語の教え方について、様々な議論が起きています。
国語力の有無は教育制度の問題以前に、本を読む習慣があるかなど家庭環境に左右されると言うことです。学校に行き、国語を習う時間は、人生の中で見ればごく1部です。
学ぶ機会があれば解決できる問題。
SNS で鍛えた映像やデザイン力、短いフレーズで相手を共感させる力は、素晴らしいものがあります。
国語と言う文字による表現だけでなく、視覚的、デザイン的な表現の影響力が強くなっている世の中で、若い世代の表現力は言葉の壁を越えて世界に通じるものだ。

意見を論理的に伝える力を

日本の義務教育における国語教育は、漢字の読み書きができ、文章の書き手の意図を読み取る力を身に付けるところで終わっている。
したがってテストも筆者が何を言いたいのかを出題者が尋ね、その意図通りの答えを正解としてきた。いわば「他者に寄り添う」力を問ってきた。
つまり日本における「読解力」は、書き手の意図を読み取る力でしかない。
一方読解力と訳されることの多い英語の「リーディング・リテラシー」は、読み取った上で自由に自分の意見を述べ、次の行動に結びつけることを指します。
日本は、学ぶ意欲や学んだ上での表現力が低いことがわかる。
学びが、それぞれの教科内に限定され、それ以外の世界に逸脱することが許されません。
他人の文章をもとに、自分の考えを紡ぐ鍛錬をしてこなかったからです。
日本も、意欲的に自分でも学びたいことを見つけ、正しいとされてきたことが本当にそうなのかを検討し、新しいものを作っていく力を養うべきです
国語力の定義を見直し、自分の考えを論理的に伝える力をもっと評価していく必要がある。

「日本語」として客観的に
「日本文学」「日本語」ではなく、「国文学」「国語」と呼んてきた。
少なくとも小・中学校の教育の場では、「国語」ではなく「日本語」として学ぶ方が良いと思っています。
日本語を話すことが日本人の前提ではないし、日本人と日本語は同一ではありません。
ですが、日本人が日本語を話すのは当たり前で、日本語は自分のアイデンティティーや感覚と一体化し、空気のようなものと考えている人が多いのも事実です。
教育の場で母語を「国語と呼んできたことで、本来は、距離がある二つのもの不可分であるかのように錯覚させてきた面がある。
日本人が日本語を話す事は英語を話すことと同様、「能力」です。
母国語と一体化しすぎているその事実を忘れ、外国語を習得する時、気がつかない「壁」になっててしまう懸念がある。
米国の教会附属小学校では、低学年から英語の授業で「文章の解析」を学びました。品詞や主節、従属節を分けたり、時制や話法を分析したりして、徹底的に解剖します。
「言葉」として客観視するのです。
相手との関係や距離によって玉虫色にニュアンスを変える日本語が好きです。深いひだを持ち、重層的な日本語の豊かさを失ってはいけませんが、教育の場では国語より日本語と呼んだ方が母語と客観的に向き合えるのではないでしょうか。

語彙力アップ

文学とは何か？
　思想や感情を、言語で表現した芸術作品
　詩歌、小説、戯曲、随筆、評論など
　今は色々な言語発信方法がある。
　「文学」を判断するのは、大企業じゃない！私たちなのだ

　言語表現の媒介とする芸術一般のことで、、、(略)、そのあと今日まで長い年月にわたり文字言語による文学が存続してきた。
　今後はテレビその他のコミニケーション方式の変化に伴い、新しく、視覚イメージを取り入れた文学の出現が考えられる。
、、(略)、こうして文学活動はいろいろの段階で現実化して作品に結晶するがその表現と鑑賞全体が文学の営みとなる。

語彙力アップ
1、本を読むこと
　大量に読む
　色々な作家・ジャンルを読む
　若いうちから読む

2、インプット&アウトプット
　知らない漢字・言葉は調べる
　新しい言葉を使ってみる
　自分の言葉としてなじませる

3、言葉が好きなこと
　言葉遊び、、、生きる意味が死ぬほどあるじゃん、縛りしりとり、山手線ゲーム
　言葉を知り、使いたいという気持ち

まとめ
　いつも色々な表現に触れる
　大人になると的確、簡潔に伝えることが大事になって
　ウイットに飛んだ会話は、コミュニケーションを助けるし、
　無機質な言葉だけだと寂しく思う

そういう意味で、読書を続けることが良いのではと考える
人間の表現は言葉が一番だな、というふうに思うので、その種類がふえていくのは
とても心が豊かになるものだと思います。